観光資源としてのコパン遺跡

コパン遺跡の概要　マヤ文明を代表する都市遺跡であるコパン遺跡は、ホンジュラス共和国西部、グァテマラ国境から12kmのコパン渓谷に位置する。古代都市コパンが栄えた時期は、5世紀から9世紀のおよそ400年間で、この間16代の王がここを治めた。メキシコ南部からホンジュラスとエル・サルバドル西部におよぶマヤ文明域の中では辺境ともいえる最東端に位置しながら、高い芸術性を有する文化水準に達した背景には、ヒスイの産出と交易による豊かな経済力があったものと推測されている。

コパン遺跡の中心部は、大きく二つのゾーンに分けられる。ひとつは、歴代の神殿が重なり合って複雑な高層石造物の様相を呈する「アクロポリス」であり、いまひとつはステラと呼ばれる巨大で精巧な石造物が立ち並び、球技場を配した儀式の空間「グレートプラザ」である。そして、グレートプラザの東南部、アクロポリスへと到る場所には、高さ30mにも及び、約2,200のマヤ文字が刻まれた長大な「神聖文字の階段」がある。また、こうしたコパン遺跡中心部から東へ1kmのところには、貴族の居住区と推定される「セプルトゥーラス」地区がある。

コパン遺跡は、19世紀末以降現在に至るまで断続的に実施されてきた発掘調査によって、上記のような他に類を見ない顕著な遺構や色あざやかな漆喰レリーフパネル、精巧な石造彫刻品やヒスイ製品などが明らかにされ、1980年にはユネスコにより世界文化遺産に登録されている。近年までハーヴァード大学（アメリカ）など複数のチームによる発掘調査が行われるとともに、遺跡公園としての修復整備も進められている。

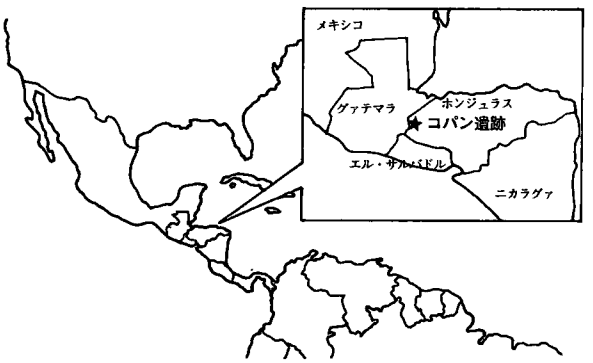

図6　ホンジュラスとコパン遺跡

ホンジュラスの観光動向とコパン遺跡　ホンジュラスの主要産業は、バナナ・コーヒーを中心とする第一次産業であり、産業に占める観光の比率は、コスタ・リカなど他の中米諸国に比べて低い水準にある。とはいえ、近年は観光産業にも重点が置かれ始め、海浜リゾートとしてのカリブ海に浮かぶロアタン島をはじめとする島々、熱帯雨林の自然探勝観光、そしてコパン遺跡を中心とするマヤ遺跡の遺跡観光が三本柱となっている。

コパン遺跡公園の1995～2001年の入場者統計を見ると、総入場者はおよそ92,000～112,000人。国籍別では、ホンジュラス国民がその40～50%前後を占め、続いてアメリカ合衆国からの入場者が13～18%を占める。他の国では、隣国グァテマラとエル・サルバドルが多く、合計ではアメリカに近い数となる。また、ドイツ、フランス、オランダ、スペイン、イタリア、イギリスといったヨーロッパ諸国も年間2,000～4,000人前後と比較的多い。ちなみに、日本は年間1,000人前後である。

この統計から読み取れることは、コパン遺跡がホンジュラス国民にとっての観光対象として高く機能していることである。人口600万人のこの国の6割もの人々が被災したといわれる1998年11月のハリケーン・ミッチの影響があった1998・1999年においても、コパン遺跡に入場したホンジュラス国民の数は落ちてはいない。このことは、コパン遺跡がホンジュラス国民自身の日常性の中でアイデンティティの対象として継承されていることを示しており、それはホンジュラス国民の90%がマヤの末裔たる先住民とスペイン系白人の混血であるメスティソと呼ばれる人々であるところに起因するものであろう。コパン遺跡に対するホンジュラス国民のこうした意識は、遺跡に非日常性を求める欧米等の外国からの観光者にとっても、単に観光者向けの見世物としてではなく生きた遺跡として享受できるという点で、すぐれた観光効果をもたらしているものと思われる。そして、欧米等からの観光者の増大が、相対的高所得者たる観光者から現地住

表3　コパン遺跡公園入場者統計（中村誠一氏提供データから作成）

年	ホンジュラス	アメリカ	日本	その他	合計
1995	41,364	17,599	1,059	37,420	97,442
1996	40,898	13,631	1,011	37,618	93,158
1997	48,101	17,821	1,441	40,192	107,555
1998	44,900	14,304	1,076	33,816	94,096
1999	51,808	11,987	951	31,098	95,844
2000	42,091	13,059	967	35,679	91,796
2001	53,010	14,921	1,136	43,114	112,181

民への所得の再配分というかたちで、現地に経済効果を及ぼすことはいうまでもない。

コパン遺跡の保存修復　一般に遺跡が観光資源として持続的に機能するためには、遺跡の調査研究とともに適切な保存·修復整備を的確に実施することが不可欠であり、もちろんコパン遺跡にもこのことは当てはまる。しかしながら、コパン遺跡の状況は必ずしも楽観を許すものではない。ひとつは、1990年代のコパン·アクロポリス・プロジェクトの考古学者たちによる行過ぎたトンネル発掘（神殿側面から横穴を掘り進める調査方法）の結果もたらされた遺跡保存に対する悪影響である。前述のように、アクロポリスは歴代の神殿が重層している構造物である。そのため、地上に姿を留めた最終期のものに先行する各段階の神殿の状況を知るにはトンネル発掘が有効な手法であり、その結果得られた成果にも顕著なものがあった。しかしながら、延長5kmにも及ぶと推測される未補強のトンネル網や、漆喰レリーフパネルの外気との接触による劣化といった遺跡保存の根幹に関わる問題が残されたわけであり、性急な調査研究による負の影響はきわめて重大である。ところで、海外からの遺跡観光と同様に、海外チームによる調査研究は、現地労働者の雇用、物品の購買等による現地への所得再配分機能を有する。であれば、この観点からも、調査研究は可能な限り持続的であることが望まれることを付記しておきたい。

いまひとつ、コパン遺跡の保存に重大な影響を及ぼしたのが、ハリケーン・ミッチによる被害である。コパン川の氾濫によりセプルトゥーラス地区の建物遺構が侵食・破壊されるとともに、上述の発掘トンネルの一部が流入した雨水のために崩壊する被害が出たと言う。これはまさに天災と人災の複合的な被害というほかはなく、早急な対策が望まれるところである。

コパン遺跡の観光基盤　次に、コパン遺跡について、観光地としての基盤の観点から一言述べておきたい。一般に、観光とは「通常の居住地を一時的に離れ、非日常的で好ましい時間と空間を消費すること」である。したがって、すぐれた観光地たる要件としては、非日常性を有する観光資源の存在とともに良好な交通・宿泊・食事が適正な対価で提供されること、が求められる。コパン遺跡において海外からの観光を考えるとき、アメリカ合衆国のマイアミからホンジュラス第二の都市サン・ペドロスーラまで空路で2時間半程度、サン・ペドロスーラからコパンまでは車で2時間半程度であり、便利な立地とは言い難い。とはいえ、サン・ペドロスーラからコパンまでの道路は整っており、アクセスに大きな問題があるわけではない。そして、そうした立地は、逆にいえば少なくとも1泊はする滞在型の観光地たる要件となるわけである。コパン遺跡に隣接するコパン市街地には、各種のランクの宿泊施設があってこれに対応しており、この点でも観光地としての基盤には問題はない。むしろ、これはコパン遺跡というよりもホンジュラス全体の問題であるが、重要課題は治安かもしれない。中米諸国の中でホンジュラスの治安がとりわけ悪いわけではないが、良好な治安をほこり自然探勝観光の対象地として、観光が主要産業の一つとなっているコスタ・リカが一つの規範となることを指摘しておきたい。

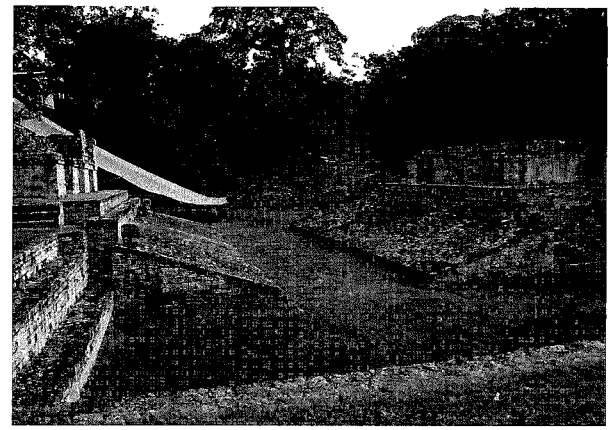

図7　グレートプラザの球技場

コパン遺跡統合計画（PICPAC）　ホンジュラス国立人類学歴史学研究所は、1998年にコパン遺跡統合計画（PICPAC）を組織し、1999年から日本の国際交流基金文化遺産保存専門家で現地での発掘経験も豊富な中村誠一氏がディレクターを努めている。PICPACは、①「アクロポリス」の中長期的な保存のためのマスタープラン作成、②トンネル崩壊個所などの緊急的・短期的保存措置、③コパン渓谷内の消滅の危機にある遺跡の救済発掘の実施、を目標に、コパン遺跡の保存修復に尽力している。筆者らは、2001年9月にPICPACからの招聘により、現地で開催されたコパン遺跡保存会議に出席した。本稿は、その際および帰国後に中村氏から提供された情報・資料をもとに、観光の視点を加えてコパン遺跡を論じたものである。PICPACならびに中村氏に感謝するとともに、コパン遺跡の保存・修復整備の成功と観光資源としての持続的な発展を祈りたい。　（小野健吉）